論　文

李頎の士人描写詩について（二）

A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati Part II

川口　喜治*
Yoshiharu KAWAGUCHI

Abstract

The purpose of this article is to research Li Qi's literature, especially to understand the features of his poems representing High Tang Literati. This article is divided into 4 parts.

Part II endeavors to research the verse representing Literati (including the poets themselves) in the High Tang without Du Fu and Li Qi.

When it comes to the High Tang, the verse defines characteristics to represent Literati as a specific and concrete figure. Each poet describes others in their own peculiar way, that is, the poems representing Literati come to reflect each poet's own personality and lifestyle.

【キーワード】李頎、盛唐詩、士人描写

*山口県立大学国際文化学部　Faculty of Intercultural Studies

本論は、前稿[1]に続く、李頎の士人描写にかかる作品に関する考察である。節の番号は前稿の続きとし、注番号は新たに振り直す。

（三）

本節では、盛唐の士人描写の作品を概観する。

盛唐でまず注目すべきは、李隆基・玄宗皇帝の作品であろう。

……　……

聞有幽棲者　聞く　幽棲の者有りて
居然厭俗塵　居然として俗塵を厭うと
林泉先得性　林泉に先ず性を得
芝桂欲調神　芝桂に神を調（ととの）えんと欲す
地道踰稽嶺　地道　稽嶺を踰（こ）え
天台接海濱　天台　海浜に接す
……　……

「王屋山送道士司馬承禎還天台」（『全唐詩』巻三[2]）

……　……

集賢招衮職　集賢　衮職を招き
論道命台臣　論道　台臣に命ず
禮樂沿今古　礼楽　今古に沿い
文章革舊新　文章　旧新を革（あら）たむ
……　……

「集賢書院成送張説上集賢學士賜宴得珍字」（同右）

前者は、盛唐の隠者として著名な司馬承禎、後者は宰相までになった詩人張説を送別した作品である。玄宗皇帝自らが張った送別の宴での作品であり、多くの朝臣が参加し、皇帝の詩に唱和したであろう。二首とも、相手の経歴や生態を称賛する描写が存在する。初唐においても、前稿で紹介した宋之問の作品のように、このような描写自体が新しいことではない。しかし、皇帝自ら作詩し、その詩に多くの朝臣が唱和する時、唱和詩には玄宗の作詩を模倣することが少なくとも暗黙に約束されていたと考えられる。つまり玄宗の詩に人物描写の部分があるのならば、それも模倣されたはずである。その意味で、玄宗詩は、詩歌のトレンドを形成するという点で役割を果たした、ここでは詩歌において士人の経歴や生態を描写することが、広がってゆく契機になったと推測されるの

である。

次に、宰相にもなり玄宗との関係が密接であった台閣詩人の張説には次の作品がある。[3]

……　……
一朝驅駟馬　一朝　駟馬を駆り
連轡入龍樓　轡（たずな）を連ねて龍楼に入る
昔遯高皇去　昔は高皇を遯（のが）れて去り
今從太子遊　今は太子に従いて遊ぶ
……　……

「贈崔公」（巻八六）

亞相本時英　亜相は本と時英たり
歸來復國楨　帰り来たりて復た国楨なり
朝推長孺直　朝は長孺の直を推し
野慕隱之清　野は隠之の清を慕う
……　……

「岳州贈廣平公宋大夫」（巻八七）

初唐までの作品と異なる点で注意されるのは、措辞において、典故をあまり用いず、比較的平易な表現になっていることであろう。これは玄宗の作品にも共通している。

また張説で注目されるのは、多数の挽歌を作り、そこで個人の経歴を讃えていることである。『全唐詩』巻八七に多くの作品を載せる。張説は朝廷において挽歌の制作を担当していた経歴があったかとも思われる。

海岱英靈氣　海岱　英霊の気
膠庠禮樂資　膠庠　礼楽の資
風流滿天下　風流　天下に満ち
人物擅京師　人物　京師に擅（ほしいまま）にす
……　……

「崔司業挽歌二首」其一

錦帳爲郎日　錦帳　郎と為るの日
金門待詔時　金門　詔を待つの時
楊宮先上賦　楊宮　先ず賦を上（たてまつ）り
柏殿幾連詩　柏殿　幾たびか詩を連らぬ
……　……

「李工部挽歌三首」其一

先の二首と同様に、平易な表現で個人の事跡を点描している。

文化の中心が首都にあった帝国において、以上に紹介したような、皇帝である玄宗、宰相となった張説の詩作のあり方が、詩人達に影響を与えていったことは想像に難くない。そういった影響のもとで、以下に概観するように、盛唐の詩人たちはそれぞれ自己の生活や経歴などを背景に、独自の人物、士人描写の世界を造り出していったものと考えてよいであろう。

まず中央政府にいた盛唐詩人の代表として王維の作品を掲げよう。玄宗詩の影響であろう、送別詩において、相手の状況や経歴を詠み込むことが常套となっていたようである。

端笏明光宮　笏を端（ただ）す　明光の宮
歷稔朝雲陛　稔（とし）を歴（ふ）　朝雲の陛
詔刊延閣書　詔もて刊す　延閣の書
高議平津邸　高議す　平津の邸
適意輕微祿　意適えば微禄を軽んじ
虛心削繁禮　心を虚しくして繁礼を削る
盛得江左風　盛んに江左の風を得
彌工建安體　弥いよ建安の体に工なり
……　……

「別綦毋潛」（巻一二五）

明時久不達　明時　久しく達せず
棄置與君同　棄置さるること君と同じき
天命無怨色　天命　怨色無く
人生有素風　人生　素風有り
……　……

「送綦毋校書棄官還江東」（同右）

天宝五載（七四六）頃、綦毋潛が秘書省校書郎を辞して江東に帰る時の作品であり、王維はこの時、中央政府の庫部員外郎となっていた。[4] 前者では、綦毋潛の秘書省での官僚生活、処世、文学的才能を称賛している。後者は、綦毋潛の

辞職、天を怨まない高潔な風格を描く。綦毋潛が中央官僚を辞す理由は定かではないが、後者の二句目（「しかしあなたはこれも天命とお上を怨む景色もなく」[5]）から考えるに、何らかの政争に巻き込まれたか、次の官職が当たらなかったからではなかろうか。いずれにせよ、友人の中央政府の官僚辞任という経歴を描写する行為が詩歌の世界にもたらされたと考えてよいであろう。玄宗の送別詩は、相手を讃えるものであったが、王維の場合、中下流の士人階層から官僚となったゆえに、同じ境遇の士人達の政治的辛苦をよく理解できており、それゆえにその送別詩において個人的、具体的に相手のキャリアを讃え不遇に同情する措辞が可能となったのであろう。

なお綦毋潛には、自己の不遇の経歴を語った「早發上東門」（巻一三五）がある。

十五能行西入秦　十五にして能く行きて西のかた秦に入り
三十無家作路人　三十にして家無くして路ゆく人と作る
時命不將明主合　時命　明主と合わず
布衣空染洛陽塵　布衣　空しく洛陽の塵に染まる

「三十」歳という年齢は、『禮記』曲禮上「人生……三十曰壯、有室。」鄭玄注「有室、有妻也。」と礼の規範に定めるように男子が妻を娶り家庭を作る年齢であった。また『論語』爲政「子曰、……三十而立。」というとおり道徳・学問などにおいて見識が確固となる年齢でもあり、出世が早ければ物語の理想では「陌上桑」「三十侍中郎、四十専城居。」（『漢詩』巻九[6]）のように中央のエリート官僚となってもよかった。しかし綦毋潛は、「十五」で早くも都・長安に華々しく登場したが、「三十」歳になっても「無家」とあるように結婚をせず、「路人」行く宛て定まらぬ人生をおくっているということであろう。また「不將明主合」とあることから、科挙に合格できず官職に就けないため、家庭を作る余裕がおそらくないのであろう。当時の士人にあっても、職を得ることと家庭を持つことが人生における重要な問題であったことがわかろう。

ほかにも王維が送別詩において相手の経歴、境遇に言及する例は多く見られる。

讀書復騎射　読書し復た騎射し
帶劍遊淮陰　剣を帯びて淮陰に遊ぶ
……　……

「送從弟蕃遊淮南」（巻一二五）

少年客淮泗　少年　淮泗に客たりて
落魄居下邳　落魄　下邳に居る
遨遊向燕趙　遨遊　燕趙に向かい
結客過臨淄　結客　臨淄に過ぎる
……　……

「送高適弟耽歸臨淮作」（同右）

……　……
使君年紀三十餘　使君　年紀　三十余
少年白皙專城居　少年　白皙　城を専らにして居る
欲持畫省郎官筆　画省郎官の筆を持ち
回與臨邛父老書　回りて臨邛父老に書を与えんと欲す

「送崔五太守」（同右）

三例目の「畫省」は尚書省。四句目の「臨邛」は蜀の邛州の治所、卓文君の郷里。故事は蜀出身の司馬相如が武帝の命によって蜀に使いして西南夷を平定した時、蜀の父老の反対にあい、文書作ったこと（『史記』巻一一七・司馬相如列傳）。おそらく尚書省の官僚であった蜀出身の崔が邛州の太守として赴くのを送ったものであろう。

右のような送別詩における相手にかかる言及は、盛唐の多くの詩人の作においても、相手に対する関心の程度の差こそあれ、見られるようになる。玄宗の作詩、そして中央官僚として多くの中下流の士人達と交遊を持った王維の詩作が、当時の詩人の世界に影響を及ぼしたと考えてよいだろう。

王維は中下流の士人の出身であったためであろうか、不遇の生涯を送った士人への弔詞に優れた作品が見られる。「哭殷遙」（巻一二五）を掲げる。

人生能幾何　人生　能く幾何ぞ
畢竟歸無形　畢竟　無形に帰る
念君等爲死　君を念えば為に死するに等しく
萬事傷人情　万事　人の情を傷ましむ
慈母未及葬　慈母　未だ葬むるに及ばず
一女纔十齡　一女　纔かに十齢
泱漭寒郊外　泱漭として　郊外寒く

蕭條聞哭聲　蕭條として　哭声を聞く
浮雲爲蒼茫　浮雲も為に蒼茫たり
飛鳥不能鳴　飛鳥も鳴くこと能わず
行人何寂寞　行く人も何ぞ寂寞たる
白日自淒清　白日も自ずから淒清たり
憶昔君在時　憶う　昔　君の在りし時
問我學無生　我に問ずねて無生を学ぶ
勸君苦不早　君に勧むるに苦だ早からず
令君無所成　君をして成す所無からしむ
故人各有贈　故人　各おの贈る有るも
又不及生平　又た生平に及ばず
負爾非一途　爾に負くこと一途に非ず
慟哭返柴荊　慟哭して柴荊に返る

殷遙については『唐才子傳』（巻三）に「丹陽人。天寶間、常仕爲忠王府倉曹參軍。與王維結交、同慕禪寂、志趣高疎、多雲岫之想。而苦家貧、死不能葬。一女纔十歲、日哀號於親。愛憐之者賵贈、埋骨石樓山中。工詩、詞彩不羣、而多警句。杜甫嘗稱許之。有詩傳於今。」とあり、小さな役職についた経歴はあるが貧賤に苦しみ不遇の生涯を終えたのであろう。文学的には、杜甫にも認められた才子であったのであろう。王維はこの詩で、殷遙が母を埋葬できず、後に残した娘がわずか十歳であること、王維の弟子として仏教を学ぼうとしたことなどを述懐している。学問だけではなく、生活面で殷遙を十分に支えることができなかった哀しみも底に流れていると読める。このように才能を持ちながらも貧窮の中に若くして家族を残して逝去する士人は比較的多くいたと思われる。そのような士人の生態を詩歌が忌避せず描くようになったのである。なお王維には、「送殷四葬（一作哭殷遙）」「送君返葬石樓山、松柏蒼蒼賓馭還。埋骨白雲長已矣、空餘流水向人間。」（巻一二八）もあり、彼の死をよほど惜しんでいたことがわかる。

なお儲光羲にも「同王十三維哭殷遙」（巻一三八）がある。

生理無不盡、念君在中年。遊道雖未深、舉世莫能賢。
筮仕苦貧賤　仕を筮するも貧賤なるに苦しみ
爲客少田園　客と為りて田園少なし
膏腴不可求　膏腴は求む可からず
乃在許西偏　乃ち許の西偏に在り
四鄰盡桑柘　四隣は尽く桑柘
咫尺開牆垣　咫尺は牆垣を開く
内艱未及虞　内艱　未だ虞るるに及ばざるに
形影隨化遷　形影　化遷に随う
茅茨俯苫蓋　茅茨は苫蓋に俯し
雙殯兩楹間　双殯は両楹の間にあり
時聞孤女號　時に聞く　孤女の号びの
迴出陌與阡　迴かに陌と阡とに出づるを
慈鳥亂飛鳴、猛獸亦以跧。故人王夫子、靜念無生篇。哀樂久已絶、聞之將泫然。太陽蔽空虛、雨雪浮蒼山。迢遞親靈櫬、願予悲絶絃。處順與安時、及此乃空言。

『唐才子傳』に「忠王府倉曹參軍」と経歴を記すように、「爲客」郷里を離れて、「筮仕」初めて仕官したものの、小さな官職ゆえに満足な禄を食むことができなかったのであろう。所有の農地も痩せた西の片隅の土地であり、また「桑柘」に囲まれた「開牆垣」おそらく村落の垣根のあたりに暮らしていたことが描かれ、「茅茨」以下四句で、殷遙との母の棺が並び、娘の哭き声が村じゅうに響き渡る悲哀が描写されている。本論（一）で紹介した沈佺期の「被彈」は自己の獄中での悲惨な生活を描くものであった。そして王維、儲光羲の弔詞になって、他者の一士人の辛苦の生態を描くようになったと言える。またその描写が個別・具体的であることに注目してよいであろう。

ほかに王維の作品で注意されるのは、山水田園詩人と評価されるように、田家の士人を描写した作品があることである。「濟州過趙叟家宴」（巻一二七）を掲げる。

雖與人境接　人境と接すと雖も
閉門成隱居　門を閉ざして隱居を成す
道言莊叟事　道言は莊叟の事
儒行魯人餘　儒行は魯人の余
深巷斜暉靜　深巷　斜暉静かにして
閒門高柳疏　閒門　高柳疏らなり

荷鋤修薬圃　鋤を荷いて薬圃を修め
散帙曝農書　帙を散じて農書を曝す
上客搖芳翰　上客は芳翰を揺かし
中廚饋野蔬　中廚は野蔬を饋る
夫君第高飲　夫君は第だ高飲せよ
景晏出林閭　景晏に林閭を出でん

世俗を離れて、儒家・道家を修め、薬を作り、農業書を虫干しする田家の士人の生活の一コマが描かれている。陶淵明・王績に通ずる田園詩であり、更には描写対象との距離がより一層親密になったことを感じさせる作品である。描写対象との親近性は、「贈李頎」（巻一二五）においても感得できる。

聞君餌丹砂　聞く　君　丹砂を餌らい
甚有好顔色　甚だ　好き顔色有りと
不知從今去　知らず　今從り去きて
幾時生羽翼　幾時にか羽翼生えん
……　……

本稿が論じようとしてなかなかたどり着けない詩人・李頎の仙道修行を少しくユーモラスに描いた作品の冒頭である。士人が「餌丹砂」という外丹の姿の描写はこれまでには見かけられないものであったと思われる。

以上、総じて王維は、その出身階層を同じくする盛唐の詩人達の生態に対して、親近性の強い描写・表現を行なっていたと言えるであろう。

他者の描写が特徴的であった王維に対して、孟浩然は、官職にほとんど就かなかった生涯もあってか、自述の作品が比較的に注目される。自然を描写する場合に、王維が客観的な離れた態度を持つのに対して、孟浩然が自然を自らに引きつけて描写する態度と相似すると言えようか。[7]「田園作」（巻一五九）を掲げる。

弊廬隔塵喧　弊廬の塵喧を隔つるは
惟先養恬素　惟れ先の恬素を尚べばなり
卜鄰近三徑　隣を卜して三逕に近く
植果盈千樹　果を植えて千樹に盈つ
粤余任推遷　粤余　推遷に任せ
三十猶未遇　三十　猶お未だ遇わず
書劍時將晚　書劍　時は将に晩れんとし
丘園日已暮　丘園　日は已に暮る
晨興自多懷　晨に興きて自ずから懷うこと多く
晝坐常寡悟　昼に坐して常に悟ること寡なし
沖天羨鴻鵠　天を沖る鴻鵠を羨み
爭食羞雞鶩　食を争う鶏鶩に羞ず
望斷金馬門　望みは断たる　金馬の門
勞歌采樵路　労い歌う　采樵の路
鄉曲無知己　鄉曲　知己無く
朝端乏親故　朝端　親故乏し
誰能爲揚雄　誰か能く揚雄の為に
一薦甘泉賦　一たび甘泉の賦を薦めん

「弊廬」は「潤南園」という孟浩然の鄉里襄陽における住まいである。陳貽焮氏によれば、それは襄州襄陽県の県城の南方、峴山附近の江村にあった。[8]作品では、冒頭に、襄陽県城から距離を置いたところに田園を営み、都市の俗塵・喧噪から隔絶して生活しているのは、先祖が静かで質素な生活を尊んだことを継承するものだと述べている。この都市から距離を置く処世態度は、孟浩然自身によってしばしば表明されている。[9]以下、作品では、作品ではよわい三十にして、有力なつてもなく、いまだ仕官の途が見いだせない焦燥が歌われる。陶淵明や王績の影響を受けてはいるが、「植果盈千樹」「勞歌采樵路」という農林業での暮らしの点描、「三十猶未遇」「鄉曲無知己、朝端乏親故」という不遇の原因の描写など、孟浩然の生活や境遇に即した内容であり、生活には問題ない規模の荘園を持ちながら、官途に就けない当時の士人の生態を反映していると考えてよいであろう。また「三十」は前掲の綦毋潛詩で述べた、男子の道徳・学問の節目の年齢。

右の詩に見られた、孟浩然が田園生活をしているのは、先祖の処世を守っているのだという自己規定は、「南山下與老圃期種瓜」（巻一六〇）にも見られる。

樵牧南山近　樵牧　南山近く
林閭北郭賒　林閭　北郭賒し
先人留素業　先人　素業を留め
老圃作鄰家　老圃　隣家と作る

不種千株橘　千株の橘を種えず
惟資五色瓜　惟だ　五色の瓜を資る
邵平能就我　邵平　能く我に就きて
開徑翦蓬麻　径を開きて蓬麻を翦るか

襄陽から見て南の山である峴山の近く、そこから見て北にある町・襄陽から遠く離れた場所で、荘園を営む自己の姿を描写している。ここでも荘園が先祖が残したものであることに言及されている。

次に「秦中苦雨思歸贈袁左丞賀侍郎」（巻一六〇）を掲げる。

苦學三十載　苦学すること三十載
閉門江漢陰　門を閉ざす　江漢の陰
用賢遭聖日　賢を用うる聖日に遭い
羈旅屬秋霖　羈旅　秋霖に属う
豈直昏墊苦　豈に直だ昏墊の苦しみのみならんや
亦爲權勢沈　亦た権勢の為に沈ずめらる
二毛催白髮　二毛　白髮を催し
百鎰罄黃金　百鎰　黄金罄く
……　……

開元十六年（七二八）秋、長安における科挙落第後の作品である。[10] 詩題の「袁左丞」は、袁仁敬。彼は、孟浩然と同じく襄陽の人であり、また科挙官僚グループのリーダーであった張九齢と親しかった。「賀侍郎」は、工部侍郎の賀知章。孟浩然は、科挙試験の合格のために、様々な人脈を頼りに推薦を得るための活動をしていたのであろうが、結果は、三十年間の郷里における学問を無駄にすることに終わった。しかもそれは「爲權勢沈」とあるように、権力を有する人間の意図によるものであると詩人には認識されていた。科挙の落第を自述するだけでなく、その原因を権力者のいわば悪意によるものであるかのように分析することは、激烈でもあり同時に冷静でもある。また受験のための資金が尽きてしまったことを率直に表白している。当時いわば世界の中心であった大都市・長安での暮らしは費用がかかり容易なものではなかったであろう。派閥関係、長安での暮らしにくさ、当時の士人達が共有した困難を描き出しているところに、この詩の新しさが存在するであろう。

また落第後郷里の襄陽へ帰る時の「歳暮歸南山」（同右）には、次のようにある。

北闕休上書　北闕　上書を休め
南山歸敝廬　南山　弊廬に帰る
不才明主棄　不才にして　明主に棄てられ
多病故人疏　多病にして　故人に疏んぜらる
……　……

先に掲げた綦毋潛詩と同様、自ら科挙の不合格を表白している。本論（一）に紹介した陳子昂の落第詩を継承するものであると言えよう。ただ陳子昂、そして前掲の綦毋潛と異なるのは、落第の表白が前例の「亦爲權勢沈」と同様に、「不才明主棄」と激烈且つ冷静になっていることである。詩人の個性も関係しようが、詩歌が自らの科挙の失敗についてこのように分析的に表現しだしたのである。孟浩然詩において、士人の自己省察の表現が一段と精確になってきたと考えられる。

さて次に李白の場合は、謫仙人と称せられたように、脱俗的な生態を持つ隠者の姿の描写に特徴を見ることができる。「元丹丘歌」（巻一六六）を掲げる。

元丹丘　元丹丘
愛神仙　神仙を愛す
朝飲潁川之清流　朝には潁川の清流を飲み
暮還嵩岑之紫煙　暮には嵩岑の紫煙に還る
三十六峰長周旋　三十六峰　長に周旋す
長周旋　長に周旋し
躡星虹　星虹を躡む
身騎飛龍耳生風　身は飛龍に騎りて　耳には風を生じ
橫河跨海與天通　河を横ぎり海に跨がり天に通ず
我知爾遊心無窮　我知る　爾の遊心の窮まり無きを

李白と交遊を持った道士・元丹丘の姿を「歌」として描いたものである。「歌」として虚構性を帯びて描かれており、もちろん全てが現実の生態ではい。むしろ極端な誇張としてのユーモアさえ感じ取ることができる。しかしながら、隠者の姿をこれほどまでに活写できるのは、神仙に強くあこがれた李白ならではであろう。その意味で士人の生態の描写にあらたな形をもたらしたと考えてよかろう。

では李白が描く隠士の現実の姿はどのようなものであったのであろうか。まず有名な「贈孟浩然」（巻一六八）を掲げる。

吾愛孟夫子　吾は愛す　孟夫子
風流天下聞　風流　天下に聞こゆ
紅顔棄軒冕　紅顔　軒冕を棄て
白首臥松雲　白首　松雲に臥す
醉月頻中聖　月に酔いて頻りに聖に中たり
迷花不事君　花に迷いて君に事（つか）えず
高山安可仰　高山　安んぞ仰ぐ可けんや
徒此揖清芬　徒（いたずら）に此こに清芬に揖す

中間二聯において、孟浩然の官途を棄てて隠棲し、花月に酒を楽しむ長老としての姿が描かれている。襄陽の名士であり先輩の孟浩然への敬愛もあろう、その姿の描写は実際を離れて理想的に形象化されている部分もあると考えられる。ただ、もう少しく具体性をもった描写も見られる。「贈參寥子」（同右）を掲げる。

白鶴飛天書　白鶴　天書を飛ばし
南荊訪高士　南荊　高士を訪ぬ
五雲在峴山　五雲　峴山に在り
果得參寥子　果して參寥子を得たり
骯髒辭故園　骯髒（こうそう）として故園を辞し
昂藏入君門　昂藏として君門に入る
天子分玉帛　天子は玉帛を分かち
百官接話言　百官は話言に接す
毫墨時灑落　墨を毫（ふる）いて時に灑落たり
探玄有奇作　玄を探りて奇作有り
著論窮天人　著論は天人を窮め
千春祕麟閣　千春　麟閣に秘す
長揖不受官　長揖して官を受けず
拂衣歸林巒　衣を払いて林巒に帰る
余亦去金馬、藤蘿同所歡。相思在何處、挂樹青雲端。

孟浩然にも「贈道士參寥」（巻一六〇）があり、右の詩中にも襄陽の「峴山」の名が見え、また王琦が「參寥子、當時逸士。其姓名無考。蓋取莊子之説以爲號也。」（『李太白文集』巻九）ということから、孟浩然と同郷の隠士であったろう。皇帝の招きに応じて都に上り、その才能を示しながらも、官を受けずに帰ったとの経歴が描かれる。しかし現実としては、「終南捷径」のようなかたちで都に召されたが、取り立てられることがなかったということであろう。皇帝や中央政府は野に遺賢あることをいわば失態と考えたのであり、隠者をしきりに探しては招聘したが、隠者の方も低く評価されてはならないという駆け引きがあったと思われ、結果として仕官はかなわなかったのであろう。当時このような隠士はあまた存在したに違いなく、その生態の一端を伝えてくれる作品として位置づけることができよう。

次に「秋浦歌十七首」其十六（巻一六七）を掲げる。

秋浦田舍翁　秋浦　田舍の翁
採魚水中宿　魚を採りて　水中に宿す
妻子張白鷴　妻子は白鷴（かん）を張り
結罝映深竹　結びし罝（しょ）は深竹に映ず

この「翁」を隠士（士人階級）と確定はできないが「田舍」とあり、李白が訪ねた相手であり、李白と対等に描かれていることから、士人あるいはそれに近い人物が後半生の杜甫が農業をしたように、漁業を営んでると考えることもできよう。いずれにせよ当時の人々の生活を伝える一首ではある。

李白詩においては、比較的、個別・具体的に一士人の生態を描いた作品も見受けられる。「贈劉都使」（巻一七〇）を掲げる。

東平劉公幹　東平の劉公幹
南國秀餘芳　南国に余芳を秀づ
一鳴即朱紱　一たび鳴けば即ち朱紱し
五十佩銀章　五十にして銀章を佩（お）ぶ
飲冰事戎幕　氷を飲んで戎幕を事とし
衣錦華水鄉　錦を衣（き）て水郷に華（かがや）く
銅官幾萬人　銅官　幾万人
諍訟清玉堂　諍訟　玉堂を清む
吐言貴珠玉　言を吐けば珠玉より貴く
落筆迴風霜　筆を落とせば風霜を迴らす

而我謝明主　而るに我は明主に謝し
銜哀投夜郎　哀しみを銜んで夜郎に投ぜらる
歸家酒債多　家に帰りて酒債多く
門客粲成行　門客　粲として行を成す
高談滿四座　高談　四座に満ち
一日傾千觴　一日　千觴を傾く
所求竟無緒　求むる所は竟に緒無く
裘馬欲摧藏　裘馬　摧藏せんと欲す
主人若不顧　主人　若し顧みざれば
明發釣滄浪　明発　滄浪に釣らん

劉都使を劉楨に喩えてその詩文の才を褒めたあと、彼の出世の経歴と「銅官」（銅を産出する町の役所）のある町でその政治的才能と文才を発揮していることを讃えている。詩の最後に李白が劉に援助を求めていることから、彼を称賛する表現が続くのは当然ではあるが、その称賛の言辞が、劉の経歴に即したものであり、また地方長官として活躍する姿が描かれていることが注目されよう。後半は、李白の現況を描く自述の部分となる。当然ではあろうが、この部分に作品の重点が置かれている。「摧藏」は隠す、「明發」は夜明け方。安史の乱の中になあって永王璘に荷担し流罪を受けた以後の現況が述べられている。罪を赦されて後も、酒をあおるように飲み、多くの仲間達と談論活発である李白の生態は、生活資金に関してなど如何にしてそれが可能であったのか興味深い問題を提供してくれる。杜甫の貧窮を嘆く自述詩との違いは、やはりその経済的な条件が大きな背景としてあったのであろう。李白詩の場合は、特殊な事例ではあるかもしれないが、それはそれで当時の士人の生態を伝えてくれていると思われる。

さらに李白の自述詩を掲げる。「留別廣陵諸公」（巻一七四）である。

憶昔作少年　憶う　昔　少年作(た)りしとき
結交趙與燕　交りを結ぶ　趙と燕と
金羈絡駿馬　金羈　駿馬に絡(つな)ぎ
錦帶橫龍泉　錦帯　龍泉を横たう
寸心無疑事　寸心　疑う事無く
所向非徒然　向う所　徒然たるに非ず
晚節覺此疏　晚節　此の疏なるを覚え
獵精草太玄　精を猟して太玄を草す
空名束壯士　空名　壮士を束ね
薄俗棄高賢　薄俗　高賢を棄つ
中回聖明顧　中ごろ聖明の顧を回らし
揮翰凌雲煙　翰を揮いて雲煙を凌ぐ
騎虎不敢下　虎に騎(の)りて敢えて下りず
攀龍忽墮天　龍に攀づるも忽ち天より堕つ
還家守清眞　家に還りて清真を守り
孤潔勵秋蟬　孤潔　秋蟬に励まさる
鍊丹費火石　鍊丹　火石を費やす
採藥窮山川　薬を採りて山川を窮め
臥海不關人　海に臥して人に関わらず
租稅遼東田　租税　遼東の田
乘興忽復起　興に乗りて忽ち復た起ち
棹歌溪中船　棹歌す　渓中の船
臨醉謝葛強　酔に臨んで葛強に謝し
山公欲倒鞭　山公　鞭を倒(さかさま)にせんと欲す
狂歌自此別　狂歌して此れより別れ
垂釣滄浪前　釣を滄浪の前に垂れん

第四句目の「龍泉」は宝剣の名前。若くして任侠の世界に入り充実した日々をおくったこと、それを悔い改めて勉学に励んだが世間から認められなかったこと、玄宗皇帝に認められて長安で活躍したが追放されたこと、その後、仙道や薬などを探求し脱俗的な生活をおくっていることが、自伝的に綴られていく。練丹や採薬など、当時広まっていた隠士の生活を描いていることと共に興味が持たれるのは「租税遼東田」である。この句はおそらく、遼東にある李白の田地から上がる年貢のようなものを指し、それで生活をしていたということであろう。[11] 中下級の士人達が土地を所有し、それを生活の経済的基盤にしていたことがわかる興味深い詩句である。

総じて李白の士人描写は、隠者の姿を描くことに新たな世界を広げていったと考えられ、自述詩は李白自身の実際の生活に比較的近い状況を反映したもの

であると言えよう。

盛唐詩人については、以上に掲げた詩人のほかには、後に論ずる杜甫を除き、高適や岑参を検討しておきべきであろう。高適は初めての仕官が五十歳と失意の期間が長かったからであろう、官途において不遇の人物への共感がその詩に多く見られる。「宋中遇劉書記有別」（巻二一二）を掲げる。

何代無秀才　何れの代か秀才無からん
高門生此才　高門　此の才を生む
森然睹毛髪　森然たる毛髪を睹れば
若見河山來　河山の来たるを見るが若し
幾載困常調　幾載　常調に苦しみ
一朝時運催　一朝　時運催す
白身謁明主　白身　明主に謁し
待詔登雲臺　待詔　雲台に登る
相逢梁宋間、與我醉蒿萊。塞楚眇千里、雪天晝不開。末路終離別、不能強悲哀。男兒爭富貴、勸爾莫遲迴。

劉書記の官僚試験における躓きが具体的に描写されていることが注目される。「常調」は、この詩においては通常のコースの科挙だと思われる。「高門」の「秀才」と讃えられているので郷試は合格しているのであろうが、「白身」とあるので礼部試には、何年も及第できなかったことがわかる。「白身」の二句は、皇帝が特別に行なう制科の受験の機会を得たということであろう。しかし作品の後半から考えるに、合格はかなわず、いずれか節度使の「書記」の職に就くことになったのであろう。当時、科挙に合格できない、合格して職を得ても任期終了後に次の職を得るのに待選しなければならない、あるいは次の職を得ることができない士人たちの多くが[12]、そのキャリアをつなぐために節度使の幕僚となっていた[13]。この詩は、その生態を如実に示してくれる資料としても興味深いであろう。なお「森然」の二句はわかりにくいが、頭髪が通常よりはかなり多い特徴的な姿（いわゆる天然パーマかもしれない）を描いていると思われる。

次に「別從甥萬盈」（巻二一四）を掲げる

諸生曰萬盈　諸生曰く　万盈は
四十乃知名　四十にして乃ち名を知らると
宅相予偏重　宅相　予　偏重し
家丘人莫輕　家丘　人　軽んずる無かれ
美才應自料　美才　応に自ら料るべし
苦節豈無成　苦節　豈に成る無からんや
莫以山田薄　山田の薄きを以て
今春又不耕　今春　又た耕さざる莫かれ

「宅相」は外甥、「家丘」の丘は孔丘で、世間に知られていない君子を言う。末二句から、万盈は山に少しの土地を所有していることがわかる。どちらかと言えば貧窮の部類に属する士人であり、それゆえ苦節の期間が長く四十にしてはじめて他の士人に並んだということであろうか。

高適は弔詞においても、生前不遇の知識人の生態を鋭く抉る。「哭單父梁九少府」（巻二一二）を掲げる。

開篋淚沾臆　篋を開きて涙臆を沾すは
見君前日書　君の前日の書を見ればなり
夜臺今寂寞　夜台　今　寂寞として
獨是子雲居　独り是れ子雲の居なり
疇昔探雲奇、登臨賦山水。同舟南浦下、望月西江裏。契闊多別離、綢繆到生死。九原卽何處、萬事皆如此。
晉山徒峨峨　晉山　徒らに峨峨たり
斯人已冥冥　斯の人　已に冥冥たり
常時祿且薄　常時　禄且つ薄く
歿後家復貧　歿後　家復た貧し
妻子在遠道　妻子　遠道に在り
弟兄無一人　弟兄　一人も無し
十上多苦辛　十上　苦辛多く
一官恆自哂　一官　恒に自ら哂う
青雲將可致　青雲　将に致す可きに
白日忽先盡　白日　忽ち先に尽く
唯有身後名　唯だ身後の名有りて
空留無遠近　空しく留まりて遠近無し

「常時」以下、梁九の不遇の人生が追悼される。「十上」「一官」の句から、

梁は難度も科挙に落第し、おそらく生前「單父」の「少府（県尉）」に就いただけなのであろう。生前の俸禄は少なく、死後の貯えはほとんどない。「妻子在遠道」とあり、何らかの理由で家族を遠い郷里に残してひとり任地で暮らしていたのであろう。頼りになる兄弟もおらず、もしかすれば葬儀も親族以外の人物が執り行なったのかもしれない。次の「哭裴少府」（同右）も下級の地方官僚の不遇を弔う。

世人誰不死　世人　誰か死せざらん
嗟君非生慮　嗟（ああ）君　生慮非ず
扶病適到官　病を扶して適（まさ）に官に到り
田園在何處　田園は何処にか在る
公才羣吏感　公才は群吏を感ぜしめ
葬事他人助　葬事は他人の助くるなり
余亦未識君　余も亦た未だ君を識らず
深悲哭君去　深く悲しみて君の去るを哭す

「非生慮」は生計の心配がないことで死去を意味する。「扶病」の句は、官職を得たときには已に病身であったことを言うのであろう。「葬事」の句、葬儀が親族以外の人たちの援助によってはじめてなし得たことがわかる。家庭をなしていなかったのかも知れない。高適にとってはその郷里も知らない（田園在何處）面識のない人物であったが、薄官の士人の貧窮の生態を伝えている。

上記の作品のように不遇に苦しむ士人ではないが処士の生態を伝える作品として「送郭處士往萊蕪兼寄荀山人」（巻二一三）がある。

君爲東蒙客　君は東蒙の客と為り
往來東蒙畔　東蒙の畔に往来す
雲臥臨嶧陽　雲臥して嶧陽に臨み
山行窮日觀　山行して日観を窮む
少年詞賦皆可聽　少年の詞賦　皆　聴く可し
秀眉白面風清冷　秀眉の白面　風　清冷たり
身上未曾染名利　身上　未だ曽て名利に染まらず
口中猶未知膻腥　口中　猶お未だ膻腥を知らず
今日還山意無極　今日　山に還る　意　極まり無し
豈辭世路多相識　豈に世路に相識多き辞する
歸見萊蕪九十翁　帰りて萊蕪の九十の翁に見（まみ）え
爲論別後長相憶　為に論ぜよ　別後長く相い憶うを

世に出る準備として学問を受けるために荀山人の許に行こうとする年齢の若い郭処士に、高適が紹介の労をとった作品ではなかろうか。青年の士人が官途に就く前の生態を伺い知ることができよう。この青年は、「身上未曾染名利、口中猶未知膻腥。」からわかるように世間の厳しさに触れておらず、特に下句は、まだ酸いも甘いもかみ分けることができない、というほどの意味であろう。ならば面白い表現であると考える。

高適は他者の姿の描写に比較的関心があったようで、次のような作品も残している。「寄宿田家」（同右）を掲げる。

田家老翁住東陂　田家の老翁は東陂に住み
説道平生隱在茲　説道（いう）ならく　平生より隠れて茲こに在りと
鬢白未曾記日月　鬢白しくて　未だ曽て日月を記さず
山青每到識春時　山青の到る毎に　春の時を識る
門前種柳深成巷　門前　柳を種え　深く巷を成し
野谷流泉添入池　野谷　流泉　添えて池に入る
牛壯日耕十畝地　牛は壮んにして日に十畝の地を耕し
人閒常掃一茅茨　人は間にして常に一つの茅茨を掃く
客來滿酌清尊酒　客来たれば清尊の酒を満酌し
感興平吟才子詩　感興れば才子の詩を平吟す
巖際窟中藏鼴鼠　巖際の窟中に鼴鼠蔵れ
潭邊竹里隱鸕鷀　潭辺の竹里に鸕鷀隠る
村墟日落行人少、醉後無心怯路岐。今夜只應還寄宿、明朝拂曙與君辭。

「田家」「牛壮日耕十畝地」とあり「感興平吟才子詩」とあるので、「翁」はいわゆる非識字層の農民ではなく、荘園を経営する士人であろう。「門前」の二句でその荘園の様子が比較的具体的描かれている。隠士的に形象化された田家翁の姿の部分もあるが、高適が出会った一人の翁を具象的に描いていると言えよう。特に「牛壮」の句は、これまでにあまり表現されてなかった農耕の様子を描いており注目してよいと思われる。

他者の描写に示された高適の視線は、そのまま自己にも向けられた。高適の自述詩を掲げる。「別韋參軍」（同右）である。

二十解書劍　二十にして書劍を解し
西遊長安城　西のかた長安城に遊ぶ
擧頭望君門　頭を挙げて君門を望み
屈指取公卿　指を屈して公卿を取らんとす
國風沖融邁三五　国風の沖融たること　三五を邁え
朝廷歡樂彌寰宇　朝廷の歓楽　寰宇に弥し
白璧皆言賜近臣　白璧　皆言う近臣に賜わると
布衣不得干明主　布衣　明主に干するを得ず
歸來洛陽無負郭　洛陽に帰り来たりて負郭無く
東過梁宋非吾土　東のかた梁宋に過ぎるも吾が土には非ず
兔苑爲農歲不登　兔苑　農を為すも　歳　登らず
雁池垂釣心長苦　雁池　釣を垂れ　心　長に苦しむ
……　……

斉言ではなく楽府的な物語的な色調も感じられるが、高適が自負を砕かれ失意のうちに布衣の暮らしをしている様子が自伝的に描かれている。次の封丘県の県尉となった「封丘作」（同右）では、より実際に即した下級官吏の生活が具体的に伝わってくる。

我本漁樵孟諸野　我は本と孟諸の野に漁樵し
一生自是悠悠者　一生　自ら是れ悠悠たる者なり
乍可狂歌草澤中　乍ろ草沢の中に狂歌す可きも
寧堪作吏風塵下　寧ぞ風塵の下に吏と作るに堪えんや
祇言小邑無所爲　祇だ　小邑　為す所無しと言えども
公門百事皆有期　公門　百事　皆期有り
拜迎官長心欲碎　官長を拝迎して　心碎けんと欲し
鞭撻黎庶令人悲　黎庶を鞭撻して人をして悲しましむ
歸來向家問妻子　帰り来たりて家に向いて妻子に問えば
擧家盡笑今如此　家を挙げて尽く笑う　今は此くの如しと
生事應須南畝田　生事　応須南畝田
世情付與東流水　世情付与東流水
夢想舊山安在哉　夢想舊山安在哉
爲銜君命且遲迴　爲銜君命且遲迴
知梅福徒爲爾　知梅福徒爲爾
轉憶陶潛歸去來　轉憶陶潛歸去來

下級官僚としての、期待に反してのよろず期限に逐われる繁忙な勤務、屈辱的な行為、民衆に鞭打つ悲哀を高適の実際の役人生活に即して描写していると言えよう。また「歸來」の二句は、高適のグチとそれに笑って対応する妻と家族の様子が活写されており、ユーモラスでさえある。

総じて高適は、士人の不遇という視点から、共感的に他者を描き、それがそのまま自己描写につながっていると考えてよいだろう。

本節最後に、高適とともに辺塞詩に優れた作品を残したと評価される岑参を見てみる。岑参も他者の士人の経歴に関心を持った描写を行なっている。「送張祕書充劉相公通汴河判官便赴江外覲省」（巻一九八）を掲げる。

前年見君時　前年　君に見いし時
見君正泥蟠　君の正に泥蟠なるを見る
去年見君處　去年　君に見いし処
見君已風搏　君の已に風搏なるを見る
朝趨赤墀前　朝に赤墀の前を趨り
高視青雲端　高く青雲の端を視る
新登麒麟閣　新たに麒麟の閣に登り
適脫獬豸冠　適に獬豸の冠を脱ぐ
……　……
昨夜動使星　昨夜　使星動き
今旦送征鞍　今旦　征鞍を送る
老親在吳郡　老親　呉郡に在り
令弟雙同官　令弟　同官に双ぶ
……　……

秘書省の官僚であった張なる人物が、劉晏の属官として赴く途次に帰省するのを送った作品である。[14]「泥蟠」は不遇の状態。「風搏」は出世した状態。布衣であった張なる人物がみごと官職を得て秘書省の役人として活躍し、その後、何らかの理由で劉晏の判官となり都を去る経歴が描かれている。また両親の健在であること、弟が同じ官職にあることにも言及されている。

帰郷にまつわる作品をいま一首掲げる。「送許子擢第歸江寧拜親、因寄王大昌齡」（同右）である。

……　……
十年自勤學　十年　自ら学に勤め
一鼓遊上京　一鼓　上京に遊ぶ

青春登甲科　青春　甲科に登り
動地聞香名　地を動かして香名聞こゆ
解榻皆五侯　榻を解くは　皆な五侯
結交盡羣英　交わりを結ぶは　尽く群英
……　……
到家拜親時　家に到りて親に拝する時
入門有光榮　門に入りて光栄有らん
鄉人盡來賀　鄉人　尽く来たりて賀し
置酒相邀迎　酒を置きて相い邀迎せん
……　……

許なる人物が若くして科挙に及第して帰省するのを送る作品である。「甲科」以下の句から、進士科の及第であったと考えてよいであろう。このあと待選を経て、官僚に就くための吏部の試験に臨む。その間の帰郷であろうと考えられる。都は物価が高く、郷里で受験の準備をする方が暮らしやすかったのであろうか。引用の後半はまさに故郷に錦を飾る様子が想像されている。長期間の勉励を経て科挙に及第し、郷里に凱旋するのも当時の士人の典型的な生態であり、それを活写した作品である。

次に、官僚となったのちの士人の経歴を描いた作品を掲げる。「送張獻心充副使歸河西雜句」（巻一九九）である。

將門子弟君獨賢　將門の子弟　君　独り賢なり
一從受命常在邊　一たび命を受けて従(よ)り常に辺に在り
未至三十已高位　未だ三十に至らざるに已に高位
腰間金印色赭然　腰間の金印　色　赭然たり
前日承恩白虎殿　前日　恩を白虎殿に承け
歸來見者誰不羨　帰り来たりて　見る者　誰か羨まざらん
篋中賜衣十重餘　篋中の賜衣は十重余
案上軍書十二卷　案上の軍書は十二巻
看君謀智若有神　君の謀智の神有るが若きを見
愛君詞句皆清新　君の詞句の皆な清新なるを愛す
……　……

張献心なる人物が、都において節度副使の正式の任命を受けて、河西の幕府に帰るのを送った作品である。「將門」とあるから武官の一族であったのであろう。西域における吐蕃など異民族との戦闘が盛んであった盛唐期において、武官の出世は早かったと思われる。文官・文人の経歴以外にも、詩人達の視線が向けられていたのである。

岑参は他の詩人と同様、不遇の士人の姿も描いている。「梁州對雨懷麴二秀才便呈麴大判官時疾贈余新詩」（巻一九八）を掲げる。

……　……
麴生住相近　麴生　住むこと相い近きに
言語阻且乖　言語　阻まれ且つ乖(はな)る
臥疾不見人　疾に臥して人に見(あ)わず
午時門始開　午時　門　始めて開く
終日看本草　終日　本草を看て
藥苗滿前階　藥苗　前階に満つ
兄弟早有名　兄弟　早く名有り
甲科皆秀才　甲科　皆な秀才
二人事慈母　二人　慈母に事え
不弱古老萊　古の老萊に弱(おと)らず
……　……

「麴生」は麴大・麴二の兄弟のうち兄の麴判官である。兄弟ともに進士科に及第しており、麴大が病の床に伏せっていること、二兄弟は親孝行で著名な古の老萊子に劣らない孝行を母にしていることが点描される。二兄弟は不遇とまでは言えないかも知れないが、弟の呼称が「秀才」であることから官僚とはなっておらず、兄も「判官」どまりであることから、決して輝かしい経歴とは言えない。おそらく麴大もこの時には官職を離れ、兄弟二人、実家の母のもとに生活していたのであろう。また父はすでに亡くなっているとも考えられ、決して豊かな生活ではなかったと思われる。この作品は、右のような生活をする兄弟士人の姿を描き出しているところに、新しさがあると思われる。なお引用冒頭「麴生」の二句は、近所に住んでいながらつきあいがさほど親密ではないことを言うのであろう。身近な日常を描いていると言えよう。

最後に「北庭貽宗學士道別」（同右）を掲げる。

萬事不可料　万事　料る可からず

歎君在軍中　君の軍中に在るを歎ず
讀書破萬卷　書を読みて万巻を破るに
何事來從戎　何事ぞ　来たりて戎に従う
曾逐李輕車　曾ては李軽車を逐い
西征出太蒙　西征して太蒙を出づ
荷戈月窟外　戈を月窟の外に荷い
擐甲崑崙東　甲を崑崙の東に擐う
兩度皆破胡　両度　皆な胡を破るも
朝廷輕戰功　朝廷　戦功を軽んず
十年祇一命　十年　祇だ一命
萬里如飄蓬　万里　飄蓬の如し
容鬢老胡塵　容鬢　胡塵に老い
衣裘脆邊風　衣裘　辺風に脆し
忽來輪臺下　忽ち輪台の下に来たり
相見披心胸　相い見いて心胸を披く
飲酒對春草　酒を飲みて春草に対し
彈棋聞夜鐘　棋を弾いて夜鐘を聞く
……　……

天宝十四載（七五五）、岑参が安西・北庭節度判官として、輪台（安西都護府＝新疆ウィグル庫車県の東）にあったときの作である。「宗學士」とあるからには、宗はかつて都で学士であり、引き続いての官職に就けず、結局、文武に優れながらも十年で「一命」一度きりの官僚経験しかなく、北庭まで来たのであろう。すでに述べたが、当時、正規の官僚になれない士人達がキャリアや生活のため辺境の節度使の辟召されてその僚佐となった。このような不遇の士人達は多くいたであろうし、岑参もその一人であった。引用の最後には、そういう境遇への共感が示されている。幕僚生活における具体的な姿は描かれていないが、当時の士人のあり方を示す作品として注目しておいてよいだろう。岑参自身に辺境経験があるからこそ描かれた士人の姿なのである。

以上、たいへん長くなったが、杜甫と李頎を除く、盛唐詩人達の士人描写を紹介してきた。このほかに劉長卿、崔顥などに注目される作品が見られるが、紙数が尽きた。総じて盛唐詩人は、前代の士人達の成果を受け、より一層個別・具体的に、自己のおかれた環境に即して、実際に近い士人達の姿を描くことに興味を持ち、描写していったと考える。繰り返しになるが、そのような作品において描かれていなければ、その存在が歴史に埋もれてしまっていた士人達の姿が伝えられているのである。

以上のような士人描写詩の流れの中にあって、李頎がどのような位置づけや特徴を持つのかを、杜甫に言及しつつ、引き続き論じてゆく目論見である。

【注】

（1）「李頎の士人描写詩について（一）」（『山口県立大学国際文化学部紀要』二二、二〇一六年）。

（2）本稿で引用する唐詩については、すべて『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）により、その巻数のみを示す。

（3）張説は一般的には初唐の詩人として位置づけられるが、玄宗との強い関係より、本稿では、盛唐詩人として位置づける。高木重俊氏に『張説―玄宗とともに翔た文人宰相』（大修館書店、二〇〇三年）がある。

（4）陳鉄民『王維集校注』（中華書局、一九九七年）。以下、王維詩の制作時期についてはこれによる。

（5）小川環樹ほか『王維詩集』（岩波文庫、一九七二年）の訳による。

（6）逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局、一九八三年）により、その巻数を示す。

（7）小川環樹『唐詩概説』（岩波書店、一九五八年）。拙稿「孟浩然詩における自然描写について（上）」「同（下）」（『山口県立大学国際文化学部紀要』三・四、一九九七・八年）。

（8）「孟浩然事跡考辨」（『文史』四、一九六五年）。

（9）拙稿「孟浩然詩に描かれた都市について」（『山口女子大國文』一三、一九九七年）。

（10）徐鵬『孟浩然集校注』「作品繫年」（一九八九年、人民文学出版社）による。以下、同じ。

（11）大野實之助『李太白詩歌全解』（早稲田大学出版部、一九八〇年）を参照。

（12）吏部の官吏任用試験受験は、礼部試合格後、次年度以後（妹尾達彦「唐

代の科挙制度と長安の合格儀礼」二五八頁、唐代史研究会『律令制―中国朝鮮の法と国家』（汲古書院、一九八六年）所収）あるいは通常三年後（平田茂樹『科挙と官僚制』八頁・四二頁、山川出版社、一九九七年）に受験するとされ、また槻木正「博学宏詞科・書判抜萃科の実施について―「循資格」を手懸りとして―」一四三頁（『関西大学法学論集』三七―四、一九八七年）は「官途に身を置くあらゆる者にとって待選は必須であり、改官、或いは（初めての：川口補）任官に至るまでに相当の年月を要したのである。」としている。また劉海峰『唐代教育与選挙制度綜論』第五章「唐代科挙出身与銓選入仕」一一〇、一頁（文津出版社、一九九一年）、王勛成『唐代銓選与文学』（中華書局、二〇〇一年）参照。

(13) 礪波護『唐代政治社会史研究』「唐の官制と官職」第三節「令外の官」（同朋舎、一九八六年）に詳しい。

(14) 岑参詩の解釈・制作背景等については、森野繁夫ほか『岑嘉州集』（白帝社、二〇〇八年）による。